ジャズ喫茶の（偽）研究

マイク・モラスキー

「ズルイよ！　そんなものを「研究」と呼ぶのは……。」直接言わなくても、周囲の研究者たちが内心そう思っていたようだ。しかし、そう思われても仕方がない。日文研の招聘研究員として一年間も京都に住みながら、全国のジャズ喫茶をめぐる。「研究」や「調査」と言えば聞こえはよいが、けっきょく北海道から沖縄まで、各地のジャズ喫茶にふらっと立ち寄り、店主に話しかけ、テキトウに情報を訊き出しながらノートに書き留める。そのような出鱈目（しかも、楽しい！）なことだから「研究」とは大義名分だろう。もちろん、店主に事前連絡を取り、インタビューに同意してもらってから時間をきちんと約束し、出かける場合もあったが、何の予告も無く突然店に闖入することが私の得意な常套手段。それでも、実り多い調査になった。

皮肉ながら、その理由のひとつは近年のジャズ喫茶の衰退ぶりに見られるかもしれない。全盛時代だった一九六〇年代とはちがい、最近のジャズ喫茶は暇で仕方がない。とくに昼間開店しているジャズ喫茶を訪れると、客が一人もいないことがしばしばあり、地方都市や小さい町のジャズ喫茶となるとなおさらである。そのような店へはるばる遠くから足を運び、店主の話を訊かせてもらいたい客が現れたら嫌がる人はあまりいないだろう。はじめに多少の警戒心を見せる店主も出合ったが、だいたい話し込んでいるうちに気持ちが解け、それから何時間にわ

たり我が店の歴史などについて熱弁を振るい、おまけに酒盛りまで発展したことも何度もあった。れっきとした「研究調査」とは呼べないにせよ、ジャズ喫茶を新たな角度から考察する機会を得たことは間違いない。

＊＊＊

さて、五〇代以上の日本人読者なら、少なくとも一度ジャズ喫茶に入ったという可能性が高いだろうが、ネット時代の現在ではずいぶん減ってきたので、念のため定義しておこう――「ジャズ喫茶とは、ジャズのレコードを客に聴かせることが主目的の喫茶店である」、と。すこぶる単純明快な定義のように思われるが、それでも留意すべき点がいくつかある。

まず、「喫茶店」という用語に留意したい。一九五〇年代から七〇年代のほとんどのジャズ喫茶は昼前後から開店しており、日夜問わず客がコーヒー一杯さえ注文すれば、少なくとも二時間は邪魔されずに流れている音楽に没頭できた。懐に余裕のないジャズ好きの若者にとって、これがジャズ喫茶の一番の魅力だったのだろう。だが、客の足が途絶えてきた今日では、コーヒーだけで営業が成り立たなくなり、生き残るのに夜間のみジャズバーとして営業形態を変えるか、日中はジャズ喫茶だが夕方以降は「ジャズバー」専門という風に、ある程度は従来の営業形態を脱却することが要される。

前述の定義のなかでもうひとつ注意すべき言葉は「レコード」である。つまり、ジャズ喫茶というのはライブ演奏を主に提供するのではなく、あくまでもオーディオ機器を通して再生音源であるレコードが主役だというわけである。「レコード」はＬＰに限るか、ＣＤも含まれるかについて議論されることはあるが、ジャズ喫茶の従来の役割のひとつは、海外（主にアメリカ）からの最新のジャズレコードを客に紹介することにあり、その意味でＣＤを含めなければ

最新のジャズを聴かせることができなくなるため、情報基地としての役割を失ってしまうから、私は他の条件さえ満たしていればCDしかかけない店でもジャズ喫茶として認める（いうまでもなく、ネット時代の現在では、最新の情報と音源が容易に入手できるだけに、そもそも情報基地としての役割も無効になっているだろうが、その問題をここで棚に挙げたい）。

こだわりあるジャズ喫茶では、千枚以上のLPが店内の棚に並んであり、一万枚以上のコレクションを誇る店もいまだに数軒残っている。レコードをいっさいかけないでCD専門のジャズ喫茶でも、名盤レコードのジャケットを店内に飾ることにより当店が「本格派」であることをアピールすることが常套手段になっている。同様に、個人ではなかなか購入できない超高級のオーディオ機器が設置されることも、その店の音質に対するこだわりを演出する効果を兼ねている。実際にジャズ喫茶客のなかに、レコードよりもオーディオ機器を聴くために訪れる人もめずらしくない。要するに、レコードの数にせよオーディオの機材にせよ、ジャズ喫茶が〈希少性〉をウリにしながら〈こだわり〉を演出する側面が見受けられる。

「レコード」に関して最後に留意すべき点は、レコードやCDは、同じ再生音源媒体である有線放送やインターネットラジオなどと、本質的に違うということである。ジャズ喫茶の店主は「マスター」と呼ばれるが、まさしくジャズレコードに対しある程度の“mastery”（通暁）が求められ、常に演出される。言い換えれば、ジャズ喫茶の店主が有線放送を流すことは、まるで自己否定のような行為になり、そこまで手を抜く気だったら店をたたんだ方がよいと考える客が多いだろう。あるいは、ジャズ喫茶の店主というのは、一切喋らないラジオのジャズ番組のDJのようなものだと言えよう。通常のジャズ喫茶の場合、LPの片面（または、それに匹敵するCDの曲数）を立て続けにかけるから、DJとは違い一曲ごとに違うレコードをかけ

るわけではないが、ジャズ喫茶店主もＤＪも客／聴衆に聴かせる音楽、そしてその音の流れや組み合わせのセンスによって評価されるところが共通している。音の流れが単調にならないように気を遣わなければならず、ときに刺激や驚きを与え、ときに安堵させたりうっとりさせたりすることもあろう。つまり、聴き手の感情をうまく操るのも一役だと言える。対照的に、有線やインターネットラジオなどではその責任をすべて別人に任せている。レコードのコレクションも要されなければ、流れている音楽に対する知識も、興味でさえも、一切要されない。チャンネルだけを選べばよい――「モダンジャズ」や「ジャズヴォーカル」や「ピアノトリオ」や「ボサノバ」などのように。いわば安易な消費選択による「インスタント雰囲気」ができ上がるわけである。そのおかげで、現在のどんな飲食店であろうとジャズが聴こえてくるが、幸か不幸か希少性の高い音楽からありふれたＢＧＭと化してきた。

最後に、地方のジャズ喫茶の特徴について簡潔に触れたい。東西南北の数々のジャズ喫茶を訪れ、すでに閉業した店の店主を含め百数十人へのインタビューを行ったが、地方都市や小さい町のジャズ喫茶には、東京と京都のような「ジャズ喫茶激戦地」とはいくつかの違いが目についた。まず、地方都市のジャズ喫茶全盛時代が東京と京都より五年ないし一〇年の遅れで生じたようである。議論の余地はあるものの、私は東京のモダンジャズ喫茶全盛期を一九五〇年代末期から一九七〇年代前半までと見なしている。また、全国でジャズ喫茶の軒数が一番多かったのは一九七〇年代半ばの東京だが、同時代の京都の店舗数が五〇軒もあったので、人口比で言えば東京を上回っていたといえる。その理由はいろいろ考えられるが、当時ジャズ喫茶族の中心は学生であり、当時の京都は市内の学生人口も（人口比で）圧倒的に大きかったからである。対照的に、地方都市にジャズ喫茶があったとしても、軒数は一桁に限り、一軒しかな

い町もめずらしくなかった。上述した通り、東京と京都に比べ地方都市でジャズ喫茶が現れ始めたのが遅く、軒数がピークに達したのも一九八〇年代前半だったようである。しかし、興味深いのはそのような実態をめぐる違いではなく、地方都市のジャズ喫茶が担った役割にこそ大きな相違点があるように思う。

どんな飲食店であろうと、その役割や機能は多面的であり、客にとって違う側面が強調される。ジャズ喫茶も例外に漏れず、ある客にとって主としてジャズのレコードを聴くための場所であり、隣の客にとってオーディオシステムを楽しむ場所であり、さらに単なるファッション感覚で入っている客もあろう（「真のインテリは、ゴダールの映画を観て、サルトルを読み、そしてジャズ喫茶に入るものだ」というように）。ジャズ喫茶の歴史は昭和初期まで遡るが、当初から最新の舶来文化を紹介する側面が重要であり、一九六〇年代のモダンジャズ喫茶も最新の輸入盤レコードやオーディオ機材を披露する意味では同じ機能を果たしていたと言える。あるいは、ジャズ喫茶は音によるアメリカの疑似体験を客に提供していた、ということができよう。

地方都市のジャズ喫茶も同じ役割を果たしていたが、さらに東京（または、京都）という「二次的な憧れの場所」に対する疑似体験も提供していたことが、東北や山口県や九州などのジャズ喫茶でのインタビューから明らかになった。言うまでもなく、当時の日本では大都市と地方都市との間に情報の格差が大きく、金のない学生にとって国内旅行も贅沢だったため、東京には行きたくてもまだ行ったことのない若者が少なからずいた。そのような地方出身の若者にとって、ジャズ喫茶に入ることは「何となく都会的な空気を吸っている」ように感じられたそうである。同様に、大学のために東京や京都に数年間住んでから帰省した若者にとって、

ジャズ喫茶が都会で過ごしてきた懐かしい時間を蘇らせてくれ、回顧心に駆られてしばらく通っていたと証言するジャズ喫茶客もいた。どちらの場合にも、日本の〈周辺／地方〉から〈中心／都会〉への憧れのまなざしが向けられており、地方のジャズ喫茶が果たしてきた独自の役割が見受けられる。

以上、日文研に与えていただいた贅沢極まりない一年にわたる研究（？）期間から得られた知見のほんの数例にすぎない。詳細について、拙著『ジャズ喫茶論』（筑摩書房、二〇一〇年）を参照されたい。最後に、本稿を以って、日文研に招聘してくださった細川周平教授に改めてお礼を申し上げたい（本人は今どき「あれは、失敗だった！」と嘆いているのかもしれないが……）。

（早稲田大学教授）